

聖書：Ⅱサムエル 19：1～43

説教題：王は帰途につき

日時：2019年1月27日（夕拝）

前の18章でダビデは悲しみのどん底に下りました。彼に謀反を企てた三男のアブサロムが死んだのです。ダビデは反乱軍に勝ったとは言え、わが子がこのような無残な死を遂げたのは自分のせいだ！自分がバテ・シェバと姦淫の罪を犯したからだ！と心を刺されて、悲痛な声で泣き叫びました（18章33節）。さてここからどんな良いことが起こり得るでしょうか。罪を責められて悲しみ泣くダビデはここからはい上げられるのでしょうか。

19章に入ってもダビデは引き続き嘆いています。ダビデの兵士たちは勝利を治めたのに、ダビデが息子のために嘆き悲しんでいると聞いて、まるで戦場から逃げて恥じている兵士がこっそり帰るように町に帰って来ました。ダビデは4節で、顔をおおい、大声で、「わが子アブサロム、アブサロムよ。わが子よ、わが子よ」と叫んでいました。そんな姿を見て、将軍ヨアブが叱咤します。あなたのそういう態度は家来たちを侮辱するものだ。皆あなたのために一生懸命戦ったのに何のねぎらいの言葉もなく、ただ息子のために泣き続けるとはどういうことか！息子一人が助かり、家来全部が死んだ方が良かったのか。このままなら誰もあなたのもとにはとどまらないだろう。そうすればあなたに降りかかる災いはこれまでのどんな災いよりも、もっとひどいものになるだろう！と。この厳しい言葉を受けて、さすがにダビデも立ち上がります。心は依然晴れないままでしたが兵士たちの前に出ます。ここから新しい動きが始まって行きます。

まず9節以降に記されていますように、イスラエル全部族の間にダビデにイスラエルの王として帰って来てもらいたいという思いが復活して来ます。彼らはアブサロムの策略に乗せられてダビデと戦ってしまいましたが、冷静になって良く良く考えてみるとダビデのこれまでの数々の功績が思い起こされます。アブサロムが死んだ今、我々は国外に逃げているダビデ、ヨルダン川の向こうにいるダビデを連れ戻すべきではないか。王として迎えるべきではないのか。そういう動きが起こって来たのです。

これを知ってダビデは自分の出身部族、ユダ族にアピールします。彼らも先の戦いで

はダビデに反旗を翻してアブサロムに組した人々です。しかしダビデは 12 節で「あなたがたは、私の兄弟、私の骨肉だ。なぜ王を連れ戻すのをいつまでもためらっているのか」と言って、北のイスラエルの諸部族に遅れを取らないようにとアピールします。彼がこのように働きかけたのは、今後イスラエル全体を再統一して治めるためには、出身部族・ユダ族のしっかりした支持が欠かせないと考えたからでしょう。そこでこれまでアブサロム軍の将軍であったアマサを新しいダビデ軍の将軍とします。これはダビデが彼らを受け入れているというしるしです。報復を恐れなくて良いということです。これを聞いて 14 節にあるように、ユダの人々はあたかも一人の人のように心を動かされ、王のもとに人を遣わして言います。「あなたも家来たちもみな、お帰りください」と。そうしてヨルダン川まで迎えに出ます。こうして全イスラエルがダビデのエルサレム帰還に向かって急速に動き出したのです。

さてダビデが再び王として治める時代が来るという変化の中で様々な人がダビデに挨拶するためにヨルダン川に駆けつけます。ここに 3 人とのやりとりが記されています。一人目は 16～23 節に記されているパフリム出身のベニヤミン人、ゲラの子シムイ。彼は 16 章で都から逃げて行くダビデをさんざん呪った人です。ダビデと並行して歩きながら、しつこく暴言を吐いたり、石を投げたり、ちりをかけたりした人です。彼はこのままではまずいと思ったのでしょう。ダビデのもとにやって来て、19～20 節でこのように命乞いをします。「わが君、どうか私の咎を罰しないでください。王様がエルサレムから出て行かれた日に、このしもべが犯した咎を、思い出さないでください。王様、心に留めないでください。このしもべは、自分が罪を犯したことを知っています。ご覧ください。今日、ヨセフのすべての家に先立って、わが君、王様を迎えに下って参りました。」 実に調子のいい人です。これは先の行いを悔い改めた言葉ではなく、ただ自分の命を助けてもらいたいがための政策的な言葉でしょう。ダビデとともにいたアビシャイは「彼を死刑にすべきではないか」と主張しますが、ダビデはシムイに 23 節で「あなたは死ぬことはない」と誓います。後の記事を見ると、ダビデはこのシムイをなお危険視し続けたようですが、この時はイスラエルが平和の内に統一されようとしている時であることを思って手を下さなかったのです。その意味で彼を寛大に扱ったのです。

二人目は 24～30 節のサウルの孫メフィボシェテ。彼は 9 章に出て来たダビデの親友ヨナタンの子で足の不自由な人でした。ダビデはヨナタンとの契約のゆえに彼を殺さず、

彼に特別な恵みを施していました。その彼が自分の足の手入れもせず、ひげも剃らず、衣服も洗っていない状態でダビデを迎えに来ます。ダビデは 25 節で「メフィボシェテよ、あなたはなぜ、私とともに来なかったのか。」と問います。するとメフィボシェテは「わが君、王様。家来が私をたぶらかしたのです。」と語り始めます。そして 27 節では、その家来がこのしもべのことを王様に中傷したのだと言います。その家来とは 16 章 1~4 節に出て来たツィバのことです。彼はあの時、都から逃げて行くダビデにたくさんの贈り物を持って来ましたが、ダビデから主君メフィボシェテのことを聞かれると、こう答えました。「私の主人はダビデがエルサレムからいなくなって喜んでいます。これで自分の家、サウルの家に再び王権が戻って来るとはしゃいでいました！」それでダビデは怒り、メフィボシェテに与えた土地はみなあなたのものとすると言っていたのです。しかしどうやらツィバの言ったことはウソだったようです。メフィボシェテはダビデがいなくなって喜んでいたどころか、24 節にある通り、ずっと悲しみ、心を痛めていました。メフィボシェテは 27~28 節で謙遜なやり方で正しい処置を王に求めます。それに対してダビデは 29 節で「あなたとツィバとで地所を分けるように」と言います。本来は全部がメフィボシェテのものであるはずですが、ダビデはツィバにもお世話になりました。また一度、自分が宣言したことをすべて撤回するわけにも行かないと思ったのでしょうか。このような中途半端な対応にとどまってしまいました。一方の側の言葉だけを聞いて何かを決めることの危険を改めて思わされます。

3 人目は 31~40 節のギルアデ人バルジライ。彼は 17 章に出て来た人で、ヨルダン川東側へと逃げ延びて行ったダビデを、その富をもって支えてくれた人です。ダビデは 33 節で「私と一緒に渡って行ってください。エルサレムの私のもとで、あなたを養います。」とバルジライに申し出ますが、彼は「私は年老いているから、王様の重荷になりたくない。自分の町に帰らせて下さい。」と言います。彼は王に復帰するダビデのもとに利益を求めてやって来た人ではありませんでした。むしろ彼はダビデに与えるだけの人でした。ダビデの生活はこのような敬虔な信仰者によって支えられたのです。

さてダビデの一行はついにヨルダン川を東から西へと渡り、エルサレムに向かって進み始めます。そこで思わぬ騒動が起こります。それは後から到着したイスラエルの諸部族と、先にこの場所に来ていたユダ部族との争いです。北のイスラエル人は、なぜユダの人々はダビデを奪い去り、一緒にヨルダン川を渡ったのか！と文句を述べます。これ

に対して南のユダは「王は、われわれの身内だからだ。なぜ、このことでそんなに怒るのか。」と反発します。すると北のイスラエルは「われわれは、王のうちに十の分を持っている」、すなわち多くの部族からなっている。それに王を連れ戻そうと最初に言い出したのは我々ではないか！と優先権を主張します。これに対してユダはさらに激しく反発したと記されています。この結果、ここでまさかの内乱が生じてしまいます。せっかくダビデのもとで平和の内にイスラエル全体が再統一されるかと思ったのに、また新たな問題が生じて来たのです。その成り行きは次の 20 章に記されることになります。

以上のサムエル記第二第 19 章から私たちは何を学ぶことができるでしょうか。短く三つのことを述べたいと思います。まず一つ目は急に良い導きが与えられて、イスラエルの平和的な統一が導かれるかと思ったのに、まさかの内乱が起こってしまったということ、すなわち物事はそう簡単にスンナリとは行かないということです。せっかくイスラエルがまとまりかけたのに、国外へ逃げ延びていたダビデがヨルダン川を渡って戻って来たのに、あとはエルサレムに到着するだけなのに、イスラエルの北と南が対立して紛争状態となってしまった。オ～何ということか！と頭を抱えるような状況です。私たちの生活にもこういうことがあるということです。理想通りには行かない。ここまで事が導かれたなら、もうゴールまでスムーズに導いてくれてもいいのに！と私たちは願いますが、そうはならない。あのダビデもそうだったのです。ですから私たちも自分の生活に似たようなことがあっても驚くべきではないということを感じたいと思います。あと一步のところまでメチャクチャになっても、新たな混乱が生じて、それは普通のこと、良くあること、一般的なことなのです。

二つ目は、ダビデはだからと言って被害者ぶることはできないということです。なぜこんなことが起こってしまったのでしょうか。それはもとをたどればダビデの罪と関係します。アブサロムとの戦いの根っこにあったのはダビデの罪です。全部がダビデの責任によることではないにしても、——アブサロムの責任や、今日の箇所に出て来るユダまたイスラエルの諸部族にもある点では責任があるとしても——、これらの災いの根本にあるのはやはりダビデのバテ・シェバとの姦淫の罪です。ダビデはこうして、あと一步のところまで来ながら、罪の苦さを味わわされています。このような形でも罪の重大さについて彼は学ばなければならなかったのです。

三つ目に見たいことは、それにもかかわらず今日の章全体に示されていることは、主がダビデのエルサレム帰還を導いておられるということです。なぜ主はこのように導いておられたのでしょうか。それは7章で見たダビデ契約のゆえでしょう。7章12～13節：「あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」16節：「あなたの家とあなたの王国は、あなたの前にとこしえまでも確かなものとなり、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ。』」この約束を果たすために、主があわれみをもって事柄全体を導いてくださった。これこそ自らの罪深さと不甲斐なさを思う私たちすべての者にとっての希望ではないでしょうか。確かになおここで今一つ混乱が生じます。次の20章でまた一つ大変な危機的状況が訪れます。しかし主はご自身の約束に従い、ダビデの家を堅く立ててくださる。そしてその約束が指し示すまことの王イエス・キリストをやがて送ってくださり、その方によるとこしえの恵みの支配をもたらし、信じる者たちをそこに生かしてくださるのです。

ですから私たちも何よりも確かな神と神の約束の言葉にこそ目を留めて歩みたいと思います。私たちの毎日の生活にも思わぬ混乱があるかもしれません。もう少しでうまく行くと思ったのに、すべてがひっくり返されるような出来事が生じるかもしれません。またその中で自分の罪を思わされるかもしれません。しかし神は目の前の混乱や私たちの罪に打ち勝って、ご自身の約束を真実に果たしてくださいます。今しばらく耐え忍ばなければならないとしても、この神がおられることに目を上げ、神に信頼し、神に従う歩みを重ねて行きたい。そして約束を果たしてくださる主によって救い上げられる恵みの道を歩ませていただく者でありたいと思います。